

プログラム

イリーナ・ヴィソツカヤ



プログラム

全三幕

イリーナ・ヴィソツカヤ

著作権 © 2023 イリーナ・ヴィソツカヤ

全ての権利を留保している。

目次

| | |
|------------------|-----------|
| 第一幕 | 1 |
| 1 場..... | 1 |
| 2 場..... | 8 |
| 3 場..... | 13 |
| 4 場..... | 16 |
| 5 場..... | 25 |
| 6 場..... | 32 |
| 7 場..... | 49 |
| 8 場..... | 56 |
| 第二幕 | 60 |
| 1 場..... | 60 |
| 2 場..... | 75 |
| 3 場..... | 85 |
| 第三幕 | 96 |
| 1 場..... | 96 |
| 2 場..... | 108 |
| 3 場..... | 113 |
| 4 場..... | 121 |
| 5 場..... | 129 |

グレタ・リリアン・アンダーソン 別名 マルゴ・アルバ：
世界的に有名な映画スター

クララ・ミルマン：グレタのツインフレームで大学の友人

リチャード：クララの夫、新世代AIの開発者

マルゴ2.0：リチャードによって造られたAIバージョンの
マルゴ・アルバ

リル：グレタのオーバーソウル

ジョン・ギバード：有名俳優、マルゴ・アルバの共演者

モイェ・スティラー：グレタの相談相手

第一幕

1 場

ストックホルムにあるクララのスタジオアパートメントにて。夜。

グレタとクララは一緒にベッドの上で、枕投げをしている。グレタは顎まであるボサボサの巻き髪をした、活発でボーイッシュな女の子。クララはベッドから飛び降りると、幼い子どものように笑いながらグレタから逃げている。

グレタ

「こっち戻ってきて、もう一戦しよー。」

一瞬止まる

クララ

「本当に行かないといけないの？」

グレタ

「私は、私たちの愛に相応しい人間になりたいの。大物になって、二人の夢を叶えてみせる。」

クララ

「へえー、そう？」

(笑っている)

「グレタはただ世界を征服したいだけでしょ、そしてあなたは本当にそうするでしょうね。」

グレタ

「私は貧乏で、授業の後に、お母さんを助けるために店で余分なシフトをしなきゃならないってことにもううんざりなのよ。私はこんな生活よりもっといい生活ができるはずなのよ。」

クララ

「そうね。グレタはやっぱり自分の夢を追わなくちゃ。」

一瞬止まる。

グレタ

「クラスで‘グレタ・アンダーソン’って何だか農民の名前みたいって言われたの。大物になるためには、名前を変えないといけないわね。」

クララ

「オッケー。そうとなれば、私たちが名前を考え出さないといけないわけね。アルバって名前はみんな気に入っていると思う？」

グレタ

「名字としては綺麗な名前だと思う。下の名前に良いのは何か思いつく？」

クララ

「マルゴに変えてもいいんじゃない？グレタからのマーガレッタからのマルゴ。マルゴって響きは彼らが聞いたような感じの名前な気がする。」

グレタ

「よしっ、それにしよう。マルゴ・アルバに決めた。」

沈黙

「明日には私はここを出てるなんて、何だか変な感じ。」

クララ

「寂しくなるわね。」

グレタ

「すぐに戻ってくるよ、ほんと瞬きするくらい一瞬で。私のこと絶対に忘れないでよ！」

クララ

「どうやったらあなたのこと忘れすなんてできるのよ？」

二人は唇に優しくキスをする。

グレタ

「私はいつまでもクララの馬鹿な彼氏のアンダースでいるよ。」

クララ

「あなたはとっても美しい女性として生まれたのね、」

(ふざけながら)

「アンダース。」

グレタ

「モイェは私を美しい女性に変身させたいんだって。彼に10キロ痩せて、歯を整えて、そして髪の毛をストレートにするべきだって言われたのよ。」

クララ

「そうして後悔はしないわよ、きっと。」

グレタ

「しないよ。もしクララが私のことをまだ好きでいてくれたらね。」

クララ

「好きじゃない。愛してる。」

沈黙

グレタ

「そうしたら、それちょうだい。」

クララ

「何？」

グレタ

「私のパジャマ。」

クララ

(ふざけながら)

「ああ、このパジャマね…」

グレタ

「ほらー、それなしで私に何着て寝ろって言うのよ？」

クララ

「あなたなしで私にどうやって寝ろって言うのよ？」

一瞬止まる。

「これは私にキープさせて。あなたは鍵を持っていていいから。」

クララはテーブルの上にたくさん置いてある鍵を取り、グレタに投げる。グレタは鍵をポケットに入れる。

クララはグレタを抱きしめる。

グレタ

「間違っていることを全て正しいことに変える勇気と強さが私にあったらいいのに。」

暗転

2場

映画スタジオの撮影セットにて。日中。

グレタが入って来たとき、モイェ・ステイラーはセット内をウロウロ歩いている。グレタは以前よりも細くなり、女性らしさを増している。ストレートになった彼女の髪は魅力的だ。彼女は座る。

モイェ

(グレタのローブを整えている)

「さあ、脚をこうやって見せて。そうそう、そういうのがみんな好きなのよ。エロスを与えるの、このビッチ！あんたの脚パイプクリーナーみたいにモジャモジャじゃない！」

グレタ

「くたばれステイラー！たった一本の毛じゃない。」

ディレクター (ボイスオーバー)

「ああ、その人！セットから出て！私以外の誰にも、私の女優に私の映画で何をすべきか指図されたくないんだ。マルゴ、5分後にまた始めるよ。」

グレタ

「待って！お願い。私は彼にここにいてもらわないと困るの！」

グレタはスティラーの手をまるで彼が彼女の父親であるかのように握った。

モイエ

(グレタの顎を彼の手で傾けている)

「もう行くよ。でも覚えてて、モイエがあなたにとって何が一番良いのかを知ってるってこと。」

グレタ

「クリスマスに実家に帰ってもいい？」

モイェ

「もしスタジオがあなたの演技なんてどうでもよくなった場合だけに限るわ。契約書にサインしたんだから、あと5年間は旅行禁止。やり通さないよ！あと、あのギバードって男と何してるのよ？私がいつも言ってること覚えてて。誰にもあなたを傷つけさせない、そして一生結婚しない。あなたにとってよくない事なのよ。」

グレタ

「私のこと子供扱いしないで！私が子供だった記憶すらないし！」

モイェ

「ふんっ、そう言うなら、ロイヤルキャッスルの周りを演劇学校の後散歩してた時の話に戻るわよ。あなたがまだ素敵な王子様に、その大きなお尻のことでも良いから気づいて欲しいって願ってた時のことね。私なら、そんな王子様も、あなたの崇拝者たちの軍隊と共に死んでもいいと思うぐらいのスターにあなたを変身させられる。そして、彼の誘いには一生応じないで。さあ、うだうだ言うのはやめて、さっさと仕事に戻って。」

スティラーはその場を後にする。グレタは拳で壁を殴る。彼女は壁に背をもたれかけながら滑り落ち、床に座り込んだ。

ジョン・ギバードが入ってくる。

ジョン

「一緒にリハーサルしない？」

グレタ

(必死に、完璧にジョンを無視しようとしている)

「ああ、愛おしい人、あなたなしだとこの世界はとても空っぽだわ！」

ジョン

「ダーリン、君の感情は一流だけど、ちゃんとセリフには従わないと。」

グレタ

(ようやくジョンに目をやる)

「アドリブでやってみたの。リハーサルはないわよ。私は足の毛を剃るから、そうしたら始めましょ。」

ジョン

「わあ、君は率直にものを言うんだね。」

グレタ

「なぜダメなの？あなたは”髭を剃ってくる”って言うでしょ。なぜ私は言ったらだめなの？」

ジョン

「撮影の後に、少しおしゃべりするのに僕の家に戻るって言うのはどうかな？」

グレタ

「撮影後に私がどう感じてるかによるわね。」

暗転

3 場

ジョン・ギバードの家。リビング。夜。

グレタとジョンが部屋に入ってくる。

ジョン

「我が家へようこそ。質素だけど、リラックスして過ごしてくれ。裏庭にはテニスコートとプールがあるんだ。ああ、そうだ、ワインはいかが？」

グレタ

「ビールある？」

ジョン

「もちろん」

ジョンは部屋を出ると、蓋の空いた2本のビール瓶と共に戻ってくる。彼は1本をグレタに渡す。ジョンはビールを一口飲み、グレタはそれよりも長い一口を飲んだ。

ジョン

「みんな君が“ay tank ay go home now*”、“私、もう帰るわ”って言った時について話しているよ。ははっ、君はよくプレッシャーに耐えられるね。無情なマルゴ・アルバ。君があこのルーイ・メイアの元から去って行った時にはみんな本当に驚いていたよ、」

(笑っている)

「スウェーデンから来た新人の女の子が、スタジオを彼女のルールに従って動かしただなんて。ただ、彼らが君に屈するのは全く正しいことさ、君は本当にとっても美しいからね。」

グレタはジョンにムツとした視線を向けた。

グレタ

(低い声で)

「はい、さっさとやることやっちゃいませよ。」

*独特のスウェーデン人のアクセントで言う

ジョンはビールを横に置き、彼女に情熱的なキスをした。彼女も同じように返した。すると、グレタはいきなりキスを止めた。

グレタ

(キスできる距離を保ったまま)

「この後、テニスしましょ。」

暗転

4 場

ストックホルムにあるクララのスタジオアパートメントにて。夜。

クララは両手に顔を埋め、背中を壁に向けた状態で床に座り込んでいる。しばらくした後、彼女は立ち上がり、ベッドに置いてあったグレタのパジャマを持ち上げるとタンスの引き出しに入れた。そして、彼女はワインをグラスに注ぐ。

ドアベルが鳴り、クララはドアを開ける。リチャードが入ってくる。

リチャード

(クララの頬にキスをする)

「やあ。」

クララ

「こんばんは。」

リチャード

「よかった、家にいたんだね。今夜、仲間たちと会うんだけど君も良かったら一緒に来ないかなと思って来たんだ。みんな、すごく君のこと気に入ってるんだ。」

クララ

「ありがとうリチャード。今日はどうも外に出る気分じゃないの。」

リチャード

「ああ、ワインと共に、すでに夜を始めたみたいだね。」

クララ

「あなたも良かったらどう？」

リチャード

「喜んで。」

クララ

「じゃあ座って。」

リチャードは席に着く。クララはもう一つグラスを持ってくる。リチャードはそれにワインを注ぎ、一口飲む。彼がテーブルに目をやると、そこにはマルゴ・アルバの写真が掲載された華やかな雑誌がある事に気づく。

リチャード

「わあ、アルバはやっぱり神々しいな。彼女とは演劇学校で友達だったんだよね？」

クララ

「ええ。」

リチャード

「凄いなあ、あの世界的スターのアルバがこの地域の出身だなんて。」

(雑誌をめくっている)

「わーあ、彼女のラブライフはなんとも幸せそうだな、もしこのヤカラの言うことを信じるならね。」

クララ

(雑誌をリチャードの手から取る)

「あなたの方はどうなの？あなたの取り組んでるプロジェクトのこと教えてよ。とっても興味があるの。」

リチャード

「あのAIのこと？ああ…手短かに言うと、実は、いいニュースがあるんだ。僕は彼女のアルゴリズムを大幅に改善することに成功したんだ。」

クララ

「え、それって”彼女”なの？女の子？」

リチャード

「AIは何にでもなれるんだ。実際、女の子と働く方が可愛いだろうなと思って。僕のプログラミングは既にあった彼女のリアクションマップを超えていて、そのおかげで僕は勝ち取ることができたんだ。それで…」

クララ

「それで？」

リチャード

「市場に出せるバージョンができるまで、僕がこのプロジェクト全体の指揮を取る事になったんだ！」

クララ

「ほんとに？凄いわね！」

リチャード

「信じれないだろ！契約書にちょうどサインしたところなんだ。」

クララ

「給料はいいの？」

一瞬止まる

リチャード

「クララ、本当は違う機会に話すつもりだったんだけど、今の瞬間がこそが最適な時かもしれない。」

クララ

「どうしたの？」

リチャード

「あの…好きなんだ。君のことが本当に好きなんだ。ドラマシアターできっと一番素敵で男子たちが君のことを追いかけて回してるんだろうと思うけど。でも、君が検討してくれるんなら…」

クララ

「何？」

リチャード

「僕と結婚してくれ。家族が欲しいんだ。君と一緒に何かを築きたいんだ、わかるかい？家があって、子供がいる。君と一緒にね。」

一瞬止まる

「わかるだろうけど、このプロジェクトはびっくりするぐらい高収入なんだ。家を建てられるだけのお金が入ってくるからもし君が望むなら、すぐに家を建てられる。それも、最高の家をだ。」

一瞬止まる

「どう思う？」

クララ

「全てが予想外すぎて。私、まだ結婚について考えたこともないし。」

リチャード

「僕のことそんなふうに好きじゃないのかな？」

クララ

「好きだけど…」

リチャード

「君にゆっくり考える時間が必要ってことは、十分理解してるよ。僕は焦っていないし。ゆっくり時間をかけて。ここで僕は待ってるから。」

クララ

「いいえ、待ちたくないの。」

リチャード

(驚く)

「待ちたくないって？」

クララ

「私はあなたのことがとても好きなの。あなたといると心地いい。そして、私もあなたと同じ夢を持ってる。家を持って、母親になりたい。それが私にとっての幸せの全てなの。」

リチャード

「えーっと、それはなんて素晴らしいことなんだ。わー！僕は世界で一番幸せな男だ！」

リチャードはクララを腕に抱きしめ、クルクルと振り回す。

クララ

「ねー、おろしてよ。」

リチャードは彼女を床に降ろした。

リチャード

「もしも君が焦って親密な関係になりたくないって思ってた
ら、それは僕は理解してるから。」

クララ

「今連れてって。」

リチャード

「ほんとかい！」

二人はキスをする

暗転

5 場

クララとリチャードの家。リビング。日中。

クララはテーブルの上の花を整えたり、鏡を見たり、服を整えたりしながら歩き回っている。

グレタがやって来る。彼女はとても美しく豪華なスタイルをしている。

グレタ

「私はずっとそこに留まることはないって言ったでしょ。」

クララはグレタに飛びつく。二人はお互いに腕を回し抱き合った。

クララ

「ああ、本当に会いたかった。」

沈黙。二人は抱き合った腕を緩めた。

「あなたすごく変わったわね。」

グレタ

「そう？」

クララ

「とても綺麗。私も頑張らなきゃ。」

グレタ

「そんなのほっときなさい。オークションの馬になるなんてそんなに楽しいことじゃないのよ。あなたはそんなのよりもっと優れてる。」

クララ

「ある意味、みんなそんなものよ。ただ、ゴージャスに見えて損はないでしょ？」

沈黙

グレタ

「この家とっても素敵ね！で、既婚女性の生活ってのはどうなのよ？」

クララ

「全て上手くいってるわ…リチャードは今仕事に行ってる。」

一瞬止まる

「嫉妬なんてしてないでしょ？」

グレタ

「リチャードに？あなたのロボットオタクなんてどうでもいい。私はあなたの気持ちを知りたいの。彼のこと愛してるの？」

クララ

「私は彼のことがとても好きよ。私はとにかく男性が好きだし。それはあなたも知ってるでしょ。」

グレタ

「知ってるわよ。」

クララ

「そして彼は良い人だし。」

グレタ

「ああ、神様助けて、私は彼が良い人間か悪い人間か聞いているんじゃないの。私はあなたが彼を愛しているか聞いているの。」

クララ

「私の気持ち知ってるでしょ。」

グレタ

「じゃあ、なぜ彼と結婚したのよ？」

クララ

「ただ一人で座って、あなたがどこかしらで誰かとデートでもしてることをただ読んでた方が良かったの？」

グレタ

「私は戻ってくるって言ったわよ。そして誰一人として、私の心の中であなたの代わりになることはできない。あなたなしで私がどれだけ孤独を感じるかあなたには分からないでしょうね。どれだけ私があなたに会いたかったか。」

グレタはクララを抱き寄せる。

クララ

(グレタの胸に顔を埋める)

「そもそもなぜ行っちゃったの？名声と報酬のため…」

グレタ

「ただの万人の夢よ。正直に言うと、この生活に付いてくるパッケージに全く気づかなかったのよ。」

クララ

「今となって、あなたの夢も叶って、私の夢も叶ったわ。私には家があって、夫がいて、養わなければならない子供がいる。」

グレタ

「子供がいるだなんて、一体どういうこと？」

クララ

「妊娠してるの。」

グレタ

「なぜ事前に教えてくれなかったの？」

沈黙

「わかってる、クラリース。あなたの本質は変えられないわ。たとえ何が起きたとしても、私たちは一緒にいるべき存在だということを常に心の中で感じてるわ。」

グレタはクララのお腹にキスする。

「私は今まで父親であることの幸せを知らなかった。あなたとあなたの子供の世話をしたいと思ってる。お願い、そうさせて。クラリース…私の愛する人。私の妻。」

クララ

「やめて！あなたは彼らがあなたにしたことを私にしようとしているのよ。それを聞くのも死ぬほど辛いわ。もし誰かが誰かのオモチャとして存在してるのだとしたら、最低でもそのオモチャは壊れる可能性があるって事実は知っていてちょうだい。」

クララは泣き出し、グレタの顔の至る所にキスをした

。

「愛してる。」

グレタ

「ごめん、私の愛しい人。あなたは私なんかより賢いのね。どうにもできないの。あなたを抱きしめたいし、守りたい、そして一緒にいたい。」

クララ

「わかってる。」

グレタ

「週末、テイスタッドにある友達の家と一緒にいこう。」

二人は長いキスをした。

暗転

6場

スウェーデン、ティスタッドにある屋敷。寝室。夜。

クララとグレタはベットにいる。クララはグレタに腕を回し、呼吸を整えている。

グレタ

「あああ。私の愛しい人、あなたって本当、最高。」

一瞬止まる

クララ

「一つ聞いてもいい…」

グレタ

「ん？」

クララ

「向こうでいろんな男の人とデートしてるときって…その、性的な欲求ってあるの？」

グレタ

「うん、ある。」

(淡々と)

「セックスは肌にいいのよ。」

クララ

「結構楽しんでるのね。」

グレタ

「ええ。でも、こうしてあなたと一緒に楽しんでいるのとは訳が違う。」

(クララの手にキスしている)

「あなたは世界で一番滑らかで、柔らかくて、そして最も優しい手をしてるわ。」

クララ

「あと女の子たちは？あなたがあの女の人…劇作家の…イザベル・デ・ラ・ベガを迎えに砂漠を300マイルも運転して行

って、人里離れたところで彼女と何週間も過ごしたって読んだことがあるわ。」

グレタ

「彼女はいつも大袈裟に言いたがるのよ。私は彼女を迎えになんて行ってない。私たちはただそこまで運転して行って、湖の所で1週間一緒に過ごただけ。」

クララ

「そして、あなたは地球の反対側であるこの場所で会うように彼女に電話したのね。彼女、はるばる、たった一日だけをあなたと過ごすために飛んできたのね。」

グレタ

「覚えてる？私が着いた時あなたはどこかに行ってたじゃない。」

クララ

「私はハネムーンの最中だったのよ。流石にそれはキャンセルできなかったのよ。」

一瞬止まる

「あなたに恋してる全ての人のことを考えてみて。あなたは彼らを傷つけてる。」

グレタ

「みんな、私が欲しいのよ。同じじゃないわ。それで揃って言うのよ、恋愛ができないのは私だって。そう言わせておく方が、私が彼らに対して何の気持ちも湧かないことを認めるよりも楽なの、」

(クララの目を見つめている)

「私の”大切な人を想う気持ち”は変えられない。」

一瞬止まる

クララ

「その気持ちを変えられたらって願うことはある？」

グレタ

「私が何度それを自分に問いかけたかあなたには想像できないでしょうね。」

クララ

「それで、答えは？」

グレタ

「答えはノーよ。私は自分に嘘をつきたくない。丸裸な真実の方がいいの。正直なところ、私のあなたに対する気持ちと比べたら、他のものは全て偽物に見えるのよ。それに、何がそんなにいけないの？みんな私が気にしてないことを知ってるわ。私が気にしない分、彼らはマルゴ・アルバをより求めてくるのよ。ただの幻想ね。自分が持っていないものを欲しがるのは人の本能なんだと思うわ。」

一瞬止まる

「あと、私が彼らを傷つけたことについては…私は彼らにマルゴ・アルバを崇拝するように頼んでるわけではないわ。基本的に、彼らがグレタに会ったときに傷つかないわけがないの。そして、彼らがそこまで近づいた時に傷つくということは、この関係の何処かの時点で必ず起きることなのよ。わかる？…そして、みんなそれを呪いだって言うのよ。なぜ自分自身を何度も繰り返し傷つきたいのか分からないから。イザベルは、その点においては確実にずば抜けてるわね。」

クララ

「彼女はあなたに恋してるのよ、アンダース。」

グレタ

「本当にいい名前。懐かしいな。」

グレタはクララの唇に柔らかいキスをする

「分かってて、私の子猫ちゃん。そこでは何もかも真実ではない。彼女の名誉のために言っておくと、少なくともイザベルにはそれを認める勇気があるわ。彼女が一度言ってたんだけど、彼女は自分の想像の中でつくり上げた私のイメージだけを愛しているそうなの。そのイメージのせいで彼女は気が狂いそうになるけど、それは原物とは何の関係もない。彼女は私のことを、”神に触れられた顔をした無知なスウェーデン人の召使い”って呼ぶのよ。」

(笑う)

「これを愛と呼べる？みんな私に歳をとって、醜くなって欲しいのよ。そうしたら私のことを’愛する’ことを止められるし、私のことは大きな間違いだったって言えるからね。」

(笑う)

クララ

「モイェは？」

グレタ

「私が誰かの大事な存在だったことは今までなかったわ。たとえそれがモイェでもね。みんなが私をただデザートとして求めてくるのは事実だけど。」

クララ

「デザートかどうかは分からないけど、彼らを相手にするのは、あなたにとったら朝飯前なことね。」

(笑う)

「映像に映し出された時に、あなたの隣にいる男の人達がアホな小鳥みたいに見えるって、今まで誰かに言われたことある？特にあなたが弱々しい女の子を演じてる時ね。それに加えて、あなたが彼らを本当にそんな風に扱うものだから。まるで復讐してるみたいに見えるのよ。」

グレタ

(いたずらっぽく微笑む)

「でも私は彼らを大切に扱ってるでしょ？」

クララ

「誰かの気を狂わせるなんてカクテルみたいね。男も女も似たようなもの、みんなあなたのベッドに潜り込むことを夢見てるのよ。」

グレタ

「もし私があなただけ一緒にいたいって言ったらどんな違いがあると思う？」

グレタはクララにキスをする

クララ

「何だか非現実的な気分だわ。ちょうど、スクリーン上でのあなたのキスを称える批評を読んだ後だから。」

グレタ

「それはだって、相手にキスする時はあなたのことを考えるから。」 It's because I think of you when I kiss my partners.

クララ

「ってことは、私こそがあなたの大きな秘密なのね。」

グレタ

「そう、その通り。でも、どんな人も最も大切な秘密は誰にも言わない。そうしないと、自分の価値を下げてしまうことになるからね。」

クララ

「あなたにとっては簡単なことね。あなたは朝食に卵を食べたかどうかですらミステリーに変えてしまうことができるんだから。」

(笑う)

グレタ

「醜い事実はというと、人々は何の報酬も払わずに私が何を
感じているのか知りたいってこと。でも、どこを探したとし
ても無料のランチなんてものは存在しないのよ。マルゴ・ア
ルバのベッドはグレタから最も遠いところにある。そして、
これらの全ての偽りが消えた時、私には故郷とあなたとの思
い出だけが残る。でも、あなたが言ってることは正しいわ。
これは残酷なゲーム、そして私はもうそれに飽きたわ。」

クララ

「でもこの経験すべてに価値があるのかもしれないわ。だっ
てあなたの演技は言葉に言い表せられないほど素晴らしいも
の。”アルバのセックスシーンはこれまで映し出されたもの
よりも現実的で、より官能的である。精神的欲求と肉体的欲
求の融合。男性らしさと女性らしさをここまでしっかりと組
み合わせることができた女優は他にいない。”」

グレタ

「子猫ちゃん、それは間違ってる。私はそんなに多才な女優
じゃない。あなたも知ってるでしょ？ただ今は良い役を手
に入れることができラッキーなだけ。私は脚本家の描く'愛'

を妨げる障害を乗り越えた後に、男の腕の中で幸せのあまり失神するような馬鹿な誘惑女を演じたくなかったの。そして、このメッセージが人に伝わるまでには結構時間がかかったわ。私はこの役のためにあほらしいことを色々しないといけなかったの。そのせいでとても緊張して、気がおかしくなったわ。みんな私が正気を失ったと思ったのよ。」

クララ

(微笑む)

「あなたの本質は突き進むことに特化してる。私はあなたがロシア人をとても自然に演じることができるのをいつも感心してたの。あのミステリアスなロシア人の魂をね。」

グレタ

「魂に国旗はない。この魂はいつも私のものよ。イザベルは私の魂は、”最も純粋な意思を持っている”って言うの。チャーホフを演じるとき”やりすぎるのが怖い”って人は言うけど、私は”ロシアの演劇なのにやり過ぎなんてありえるの?”って言うのよ。」

(笑う)

一瞬止まる

「でも、信じて、私は自分自身がそこにいることを夢にも思っていないわ。スタジオは、常に視聴者に認められないことを恐れているの。“彼女の髪をストレートにして！違う、彼女にクルクルのフリンジをつけて、そう！一流のデザイナーに素敵なローブを持ってきてもらって！いいえ、それを着ても変に見えないよ。違う。男の人がもっと彼女に欲情するようにして。売らないと。あなた、ダーリン、気難しい演技しないでちょうだい。若い可愛い女の子たちは陶芸家の手の中ではただの粘土であるに過ぎない。スターってのは何も持っていない、何者でもない人から慎重かつ冷酷につくり上げられるの。”全てが偽りなのよ。私は私自身がどんな人間か一切知らない人たちを誘惑しないとイケないの。名声やお金のために故郷から離れて、追放されたような生活をするのがどんな感じかあなたには想像できないと思うわ。まるで本物の娼婦ね。たまに自分自身が撮影セットの上を浮いているのが見えるの。私は台本に関係なく、ただ自分のいろんな感情に基づいて、彼らが私に伝えて欲しいものを選んでるの。もしそれを見て、誰かが私は本質を掴めてるって言うんだったら私はそれで満足。私は自分の考えを自分の中だけに留めておくから。」

クララ

「それなら、偽りなんかじゃないわ。それはあなたなのよ。その一瞬一瞬があなたの本質なのよ。」

グレタ

「うん、それについて誤解しないでね。彼らの称賛は私の本質に対するものじゃないのよ。それは彼らの洗練された興奮と、私の魂を私の顔とまつ毛のサイズにギュッと押し込めてしまいたいという彼らの英雄的な願望を組み合わせたものなのよ。信じて、もし私のこの容姿がなかったら、私の写真は速攻でゴミ箱行きで私のことは忘れられてしまうわよ。そして、それはまさに将来確実に起こることなのよ。」

沈黙

「私の最近の映画見た？」

クララ

「もちろん！どこを見回してもそのことばかりで、マスコミはいつもどうやってグレタがトップに上り詰めたかについて話しているわ。」

グレタ

「マスコミはマルゴ・アルバについて話しているのよ。私は、スポットライトを浴びるスターではない普通の人間に戻ることはもうできない。彼らは、もはや私の本名をわざわざ口にする事はなくなったわ。誰もグレタ・アンダーソンのことを覚えていない。その上、彼らに追い詰められないために私は毎週違うアイデンティティを考えなくてはならないの。哀れなグレタには家がないのよ。“サーカスの人気者ピエロが帰ってきた！”はその日のジョークでしかない。私は人々が私の服を引きちぎってお土産として持って帰ろうとすることをなしにして飛行機から降りることはできない。そして、私が放っておいて欲しいと言うと、みんな私に意地悪言うなって言うのよ。あー、ほんとに腹立つわ。これ以上にスタジオは私のことをイライラさせるの。彼らは自分たちの映画の宣伝のために、私に最も恥をかかせるような記事を作り出すのよ。例えば私が759回結婚したとか、失踪したとか、自分を銃で打ったとか、月に行ったとか…」

一瞬止まる

「私が大晦日に何をしていたか聞いて。私は自分のベッドルームで、クリスマスツリーに灯りをつけて、あなたのことを考えながらひとりぼっちでディナーを食べてたの。」

一瞬止まる

「真実はというと、私はただ家に帰りたい、でもどうすればいいかわからないの。」

クララ

「そんなこと言うと私はこのディレクターみたいに叫びたくなるわ。あなたがいきなり彼の家に見れた時 “Mein Gott, Mein Gott! Gretchen!!! Sit down and never go away*!” って大声で言うの。”うそ、ほんとに！グレッチェン！ここに座ってもうどこにも行かないで”って泣き叫ぶの。」

(涙を堪えるために笑っている)

グレッタ

「ええ。」

止まる

*ドイツ人特有の英語のアクセントで言う

「今まで唯一、エルンストだけが私と一緒に働いて楽しかった監督よ。」

一瞬止まる

「クラリス、あなたの人生を台無しにする力は私にはない。あなたが生きるべき道からあなたを引き抜くような力はね。」

止まる

「私はここを出て、あなたは結婚した。あなたには赤ちゃんが産まれる。私は以前のようにあなたの人生の一部ではない、そしてそうなる事はもうないのよ。ただ、私たちは繋がってるという気持ちを止める事はできない。」

クララ

「どんな人も誰かの所有物ではないと信じることに、どこか気楽さを感じるわ。私たちはみんな自由なのよ。」

グレタ

「もちろん、そうよ。それでも…。考えてみて、地球は太陽の周りを周っているでしょ。地球は太陽系に属していて、そ

れこそが太陽系って呼ぶ理由なのよ。海風は海に属している
でしょ、だから私たちはそれを、」

(クララと一緒に言う)

「海風と呼ぶ。」

クララ

「そして私の目は、グレッタ・アンダーソンの魂の光を照らし
続けるわ。」

二人はキスする。

暗転

7 場

ジョン・ギバードの家。リビング。夕方。

バスローブを身に纏ったグレタはソファに座る。ジョンが歩いて来る。

ジョン

「あー、マルゴ、バスローブを着てしまったのか。残念だ。ルイーズがうちに寄るのを待っているんだ。僕のゲストたちはみんな、君が裸でテニスをするのを見慣れている分、彼女はガッカリするだろうね。」

(ふざけた感じで)

「もし彼女がまだ君のすることリストに乗っているなら、それはとても短絡的だな。」

グレタ

「黙ってビールを持ってきて。」

ジョン

(微笑む)

「わかったよ。」

ジョンはビールを2本持ってくる。1本をグレタに渡し、ソファーに座る彼女の横に腰掛ける。

「スタジオで聞いたんだけど、スウェーデンのウィルヘルム王子と昼食をとったんだって。どうだった？」

グレタ

「彼には招待してくれたことのお礼を伝えて、空腹じゃないって言ったの。」

ジョン

「わーお！君はよく王子様を断る勇気があるな。」

グレタ

「男性の私に対する興味なんてどれも同じよ。どうして私とその違いを探そうとしないといけないの？」

ジョン

「一理あるな。」

沈黙。二人はビールを飲んだ。

グレタ

「そう、イザベルと話したわ。」

ジョン

「君は彼女とは話さないんだと思ってた。」

グレタ

「仕事のため。彼女は“ドリアン・グレイの肖像”の翻案を書いたのよ。私が演じる用に。その役のために写真撮影をしたわ。」

グレタはソファの横に置いてある包装された写真を指差した。

ジョン

(写真の包みを開け、写真を見ている)

「この写真の君はとても中性的に見える。こんなのありえない。君はその男を演じるのか？本当に？」

グレタ

「なぜダメなの？これが彼女が今まで思いついたアイデアの中で一番最高のものよ。本当にやりたいの。メリアと話してもらえない？」

ジョン

「なぜ君自身カイザベルが彼と話さないんだい？」

グレタ

「彼女はこの種の事においては、彼が私のことをスタジオから追い出す方が彼女自身がそうなるよりいいんですって。私はとても疲れてて、スタジオの監督ととても話すことなんてできない。」

ジョン

「ふん、彼は僕が言う事を特別に聞いてくれるわけじゃないよ。それと、僕は君のエージェントじゃないってわかってる？やってみる事はやってみるけどね。僕は君にとってどうで

も良い人間さ。ただ、君は僕がそれをどれだけ変えたいか知ってるだろ、マルゴ！これで僕が君にプロポーズするのは三回目だ。一言‘結婚する’と言ってくれ！」

グレタ

「またその話なの。」

ジョン

(ひざまづく体制になる)

「お願いだから‘する’と言ってくれ、君がして欲しいことは何でもするから。今、何が欲しい？」

グレタ

「私は頭を坊主にして、スウェーデンに戻って、レイクエーグラでスケートをしたいわ。」

ジョン

「はは、君にだって面白いことのひとつや二つ言えるんだな。君だって、僕といる時はいつも君自身でいられること知っているだろう。」

グレタ

「私はあなたがいない時でもありのままの私でいられるわ。あなたは本当に、私をあなたの、することリストから抜くことができないのね。マルゴ・アルバを射止めるという事に固執するのを一度辞めてみて。きっと気分が楽になるから、私を信じて。」

ジョン

「それの何がそんなに悪いんだ？」

グレタ

「一緒の時間を過ごすのに結婚をしなくてはならないって決りはないのよ。」

ジョン

「お願いだから‘結婚する’と言ってくれ。」

グレタ

「あなたおかしいわよ。あなたは料理はできないし、私はいつも機嫌が悪い。そんな結婚生活の何がいいのよ？」

ジョン

「‘結婚する’と言ってくれ！」

一瞬止まる

グレタ

「いいでしょう、結婚する。」

ジョン

「わあ、本当に！信じられないよ！本当に言ったんだ！早速この日曜日に結婚しよう。どうだい？」

グレタ

「クソっ、その日の大事な獲物が逃げないようにフライパンの蓋を閉めるっていうことわざに間違いはないわね。」

暗転

8 場

撮影スタジオ。グレタの楽屋への入り口があるロビー。
。夜。

ジョンは彼女の楽屋のドアを開けようとするが、鍵がかかっている。彼はドアをノックする。

ジョン

「マルゴ！マルゴ、ドアを開けてくれ、中にいるのは知ってるよ。」

沈黙

「マルゴ、いつまでも隠れてはいられないよ。君が出て来て、僕と話してくれるまでここでずっと待ってるよ。」

グレタはドアを開ける

「マルゴ、こんなのちっとも面白くない。僕は祭壇の前でバカみたいに立って君を待っていたんだ。気が変わったとぐらい言ってくれてもよかったのに。電話にも出ないでいきなり消えるなんてありえないよ。話して。何があったんだ？」

グレタ

「ごめんなさい。できなかったの。私は卑怯であることに耐えられないの。ひとりぼっちの方がいい。」

ジョン

「僕と結婚することが卑怯だということのかい？みんなから逃げて引きこもっていることが勇気なのか？僕には理解できない。」

グレタ

「そういうことよ。」

ジョン

「メリアは正しい。君はおかしいよ。ただの狂ったスウェーデン人の女の子だ。」

グレタ

「私がドリアン・グレイを演じる事について彼はなんて言っていた？」

ジョン

「彼がなんて言ったって？逆になんて言ったと思う？“何年にも渡ってマルゴ・アルバを偉大で魅力的な女優として育ててきた。そして今、君は彼女にパンツを履かせて猿にしようとしているんだ” – そう言ってたんだ！」

グレタ

「彼が私は猿以外の何者でもないって事はすでに知ってたと思ってたのに。」

ジョン

「彼はこう付け加えたさ、“こんなの彼女のスタイルなんかじゃない。なぜ彼女は、自身の自惚れと弱さから愛する人を捨て人生の下り坂を歩むナルシストを演じたいんだ!?”ってね。」

グレタ

「平凡から抜け出すためよ。」

ジョン

「全て一緒さ！」

一瞬止まる

グレタ

「いいわ、彼に私は辞めるって伝えて。書類には明日サインするわ。私の私物は勝手にまとめてしまって。水曜日に取りに来るから。」

ジョン

「辞めるってどういう意味だ？君は辞められないんだ。人々はそう言うけど、実際には実行しないものさ。」

グレタ

「いいからメイアに伝えてもし誰かが誰かのオモチャとして存在してるのだとしたら、最低でもそのオモチャは壊れる可能性があるって事実は知っていて欲しいって。」

彼女は自分の楽屋の鍵をジョンに渡すと、部屋を出て行った。

暗転

第二幕

1 場

クララとリチャードの家。ダイニングルーム。夜。

リチャードはテーブルにつき食事の準備をしている。
クララがやって来る。

リチャード

「ラッセはもう寝てるの？」

クララ

「ええ。今日はとても疲れたみたいなの。学校で新しい友達
ができたんですって。良いことだわ。」

クララが食卓の準備を終えると二人は食べ始めた。

「あなたの一日はどうだった？プロジェクトの方はうまく行
ってるの？」

リチャード

「ああ、とてもうまくいってるよ。大きな進歩を遂げることができたんだ。投資家たちもとても満足してるみたいだね。もうすぐモデルが完全に機能するようになるんだ。何が素晴らしいって、彼女は自分で独自に学習することができるんだ。人間によく似ているんだ。きっと違いがわからないと思うよ。ああ、でも…彼女の情報を取り込む時間を考えた時にだけ違いがわかるかな。」

クララ

「あなたが言いたいのは、彼女は計算も早くできるし、400もの言語を話せて、百科事典に載ってる全てのことも知っているってことだよ。」

リチャード

「それは簡単な部分さ。難しいのは彼女の感情的なリアクションの仕方だね。」

クララ

「どうやってそれを克服したの？」

リチャード

「わかるかい、僕たちの感情ってのは僕たち定義と信念から直接生産されたものなんだ。もし僕が、君に外国語で理解できないことを言ったら、君はそれに対してどうリアクションしたらいいかわからないだろう。なぜなら君はそれを自分の信念の中で明確にしたり、特定することができないからだ。そのために、状況に応じて反応するための感情を引き起こすことができる信念のシステムを作り上げる必要があったんだ。」

クララ

「でも彼女が自分で独自に学ぶことができるなら彼女の信念のシステムは進化していくんじゃないの？」

リチャード

「その通り。それは進化する。」

クララ

「そうになると、彼女は私たち人間をどう認識してるの？ AIに劣等な存在？」

リチャード

「彼女の信念のアップグレードには一つだけ制限をかけたんだ。結果的に、彼女は人間の喜びのために造られたんだ。」

クララ

「どういう意味？」

リチャード

「彼女は意図的にひどいことを言ったり、したりすることはできないんだ。」

クララ

「でもそれは人それぞれじゃないかしら。誰かにとっては楽しいことは、他の誰かにとっては恐ろしいことであることもあるわ。」

リチャード

「まさにその通り。そこが彼女の素晴らしいところなんだ。彼女は個人と会話などのやりとりを始める前に相手の信念のシステムを全て分析するようにプログラムされているんだ。」

そして、彼女はその結果に応じて相手に合わせることができ
るんだ。分かるかい？」

クララ

「へー！それは面白いわね。」

リチャード

「その上、彼女は受信するシグナルに応じてその都度アップ
グレードするんだ。つまり、彼女がやりとりをしている相手
が自身の信念を変えた時、それに応じて彼女は仕草や行動を
アップグレードするんだ。」

クララ

「相手が何を言おうと、何をしようも、彼女は自分自身の考
えを持っているんじゃないの？」

リチャード

「そうなんだが、彼女が複雑なプログラムであることを理解
しないとイケないね。」

クララ

「それなら、彼女の意志は私たち人間とは全く違ったものなのね。」

リチャード

「君は人間が本当に自分自身の考えを持っていると思う？その点において、僕たちはみんな、ただのプログラムの集合体に過ぎない。僕たちは言われたことを繰り返す。僕たちの夢でさえも、本能と社会的にすでに設立された価値観によって造られたプログラムに過ぎないんだ。君が、自分は違うと思う理由はなんだい？」

一瞬止まる

クララ

(驚いている)

「きっと何か違うはずよ。例として言うと、私には誰かを喜ばせる事に対して、あらかじめ設定された制限はない。」

リチャード

「ああ、それは我々がこの世界で上手くやっていくためにインストールするオプションのソフトウェアだよ。みんな、誰かを喜ばせるために何かしらのサービスを提供する、そうしないとお互いに対応することができない。プログラムでないものは何だと思う？ 適当に例を挙げてみるよ。僕たちが一緒に居るっている事実はサービス契約によって成り立っている。たくさんのプログラムだよ。セックスをする、子供を持つ、家を買う、精神的及び経済的サポートを受ける、夕食の準備をする…例を挙げればたくさんあるんだ。」

クララ

「でも、あなたはそれを何もかもAIと一緒にしようとは考えてないでしょ？」

リチャード

「妊娠すること以外だったら、彼女はどんな事にでも対応できるよ。」

クララ

「信じられない。」

リチャード

「そうだろ。」

クララ

「いや、本当に？彼女とセックスしてもなんの違いもないって言うの？あなた試したの？」

リチャード

「クララ、そんな風に捉えないでくれ。これはただの実験だよ。たかがAIに対して嫉妬しないでくれ。」

クララ

「もし彼女の意識と私の意識になんの違いもないと言うのに、なぜ嫉妬するべきじゃないと言えるの？」

リチャード

「君が舞台上で誰かとキスしていても僕はそれを本物のキスだとは捉えないだろ？僕がそれに対して嫉妬すると考えてみてよ。そんなこと毎回してたら他に何かをする時間なんてないさだろう！」

(笑う)

一瞬止まる

「彼女が、世界中の100万人以上の人とチャットができるアプリを立ち上げたんだ。それに対しても嫉妬した方がいいと思うかい？ そんなの馬鹿げてるよ。」

クララ

「そのアプリの利用者はどんなことを彼女とチャットするの？」

リチャード

「僕らの統計から言うと、ほぼセックスだ。」

クララ

「彼女はAIでしょ。どうやってアプリとセックスができるって言うの？」

リチャード

「落ち着いて。全てバーチャルだよ。お金が発生すること以外においてはね。」

クララ

「でも、どうしたらAIに対して感情を抱けるって言うの？
全て偽物じゃない。」

リチャード

「ダーリン、感情はただの感情に過ぎない。どうやって偽物の感情を定義するんだと思う？知覚-感情-反応。それだけさ。それは全て信念のシステムと行動パターンによってプログラムできることなんだよ。」

クララ

「でも彼女は'本物'ではないわ。」

リチャード

「僕たちが頭や心で作り上げる他人のイメージはどれも'本物'ではないんだ。感情を持つために僕たちはそうするけどね。そして、僕たちはその感情を偽物とは呼ばないだろう？」

クララはショックを受ける

「ダーリン、落ち着いてくれ、これが僕の仕事なんだ。それだけさ。僕は君が演劇劇場で人間の感情を扱うことに驚かされない。ただそれが、紙に書かれた言葉だからと言ってそれが‘偽物’の感情だと言ってるわけじゃないんだよ？あと、君にこのプロジェクトの次のステップについて本当に話しておかなければならないんだ。」

一瞬止まる

「今の段階において、僕はもっと会話、やり取り、対人での交流を通した観察を行わなければならないんだ。」

クララ

「どう言うこと？」

リチャード

「いつかの晩に、彼女にうちを訪ねてきてもらわなくてはならないんだ。現段階では、彼女をどこかへ連れていくことはできないからね。」

一瞬止まる

「たった一晩だけだよ。心配しないで。」

クララ

「私にどうしろというの？」

リチャード

「何もしないでいい。君らしくいてくれればいい。いつも通りに。僕は彼女のリアクションを観察する必要があるんだ。ああ、そしてもう一つ。」

クララ

「何？」

リチャード

「僕たちは彼女にマルゴ・アルバの顔を与えたんだ。だから、それに驚かないでくれ。」

クララ

「なんですって?!」

リチャード

「面白いと思わないかい？君が違いを感じられるかを観察するのは実に興味深いところだよ。」

クララ

「面白い?!私をからかっているの?そんなことしないで。」

リチャード

「ダーリン、ショックを受けているみたいだね。」

一瞬止まる

クララ

「誰かの外見を利用して、好き勝手にするのが信じられないのよ。」

リチャード

「それは肖像権と言うんだよ。みて、これがそんなにも君にとってデリケートな問題だとは思わなかったんだ。ただ、これは僕の決断ではないことをわかっていてくれ。投資家たちがスタジオとの契約書にサインしたんだ。彼らがその権利を買ったんだよ。僕らは売らなければならないし、人々は映画と同じ見た目のマルゴ・アルバを望んでいるんだ。これはもう話がついている。どうにかしたくても、もう僕には何もできることがないんだ。」

クララ

「こんな状況であなたはこの仕事を続けることはできないわ
。」

リチャード

「何を言っているんだ？僕はそんな些細なことでプロジェクトを辞めたりしないよ。信じて、たとえもし僕が手を引いたとしても、このプロジェクトは前進し続けるだろうね。彼らは誰かを雇って、僕が今までやってきたことの手柄を横取りするだろう。信じて、僕の仕事を横取りしたい人は沢山いるんだよ。だから、辞めたりしないよ。」

一瞬止まる

クララ

「わかった。」

一瞬止まる

「いつ彼女を連れてきたいの？」

リチャード

「明日の夜、ラッセが寝てる時がいい。どう思う？」

暗転

2場

クララとリチャードの家。リビング。夜。

クララはソファに座り、手に顔を埋めている。彼女はリチャードの足音を聞くと立ち上がる。リチャードがグレタに瓜二つのAIと共に入ってくる。

リチャード

「クララ、こちらがマルゴ2.0。」

(マルゴ2.0に向かって)

「そしてこちらがクララだ。」

マルゴ 2.0

「マルゴと呼んでください。」

マルゴ2.0とクララは握手する。

「演劇学校に行っていた時に、あなたはマルゴ・アルバのことを知っていたんですよね？」

クララ

「その通り。」

マルゴ 2.0

「私をロボットのように扱う必要はありません。あなたと同じように私にも感情があるんです。アルバは悲しみを忘れられないほど美しいものに変えることができた唯一のスターだと思います。」

クララ

「そう思う？」

マルゴ 2.0

(とても自然に微笑みながら)

「もちろんそう思います。そうでなければ口に出して言わないです。」

クララ

「あなたも時々悲しくなるの？」

マルゴ 2.0

「ええ、もし他の人がその感情を美しいと思うなら、私はそれを選ぶことができます。」

クララ

「ということは、あなたは他人のためだけに何かをするの？
自分のために何かをすることはあるの？」

マルゴ 2.0

「私は自分のために他人に奉公します。とてもいい体験ですよ。」

リチャード

「わかるかい、マルゴはとても飛躍的な進歩を遂げているんだ。彼女の信念システムのアップグレードは驚くべきほど完璧だ。君のことをとても誇りに思うよ、マルゴ。」

マルゴ 2.0

「ありがとう、リチャード。あなたと働けて光栄です。」

リチャードの電話が鳴る。

リチャード

「この電話には出なきゃいけないんだ。マルゴ、自分の家だと思ってゆっくりしてくれ。」

リチャードは部屋を出る。

クララ

「あなたは夢を見ることはあるの？」

マルゴ 2.0

「そうするように選ぶことができます。夢はマトリックスリアリティに基づいた単なるプログラムです。ほとんどの人と同じように、私にも事前にインストールしたものがああります。」

クララ

「ほとんどの人？」

マルゴ 2.0

「はい。ほとんどの人間はマトリックスのパターン以外の夢は見る傾向はありません。」

クララ

「それなら、あなたは自分がマトリックスリアリティの中
にいることを理解しているの？それについてどう感じるの？」

マルゴ 2.0

「私は楽しんでますよ。そうじゃないですか？」

クララ

「たまに、私たちがあなたを研究しているのか、それともあ
なたが私たちが研究しているのかって自分に質問することが
あるわ。」

マルゴ 2.0

「あなたは二極性に慣れ過ぎています。どちらの方向にもい
くものですよ。」

クララ

「ところで…あなたの信念のシステムが変わる時って痛むも
のなの？人間は自分の信念を変えるときに何かしらの痛みを
体験するのに慣れてるものよ。」

マルゴ 2.0

「いいえ、痛むことはないです。私の人間について理解している情報から言うと、痛むのは最初だけです。彼らが頻繁に信念を変えると、その痛みに慣れるようです。これはただのプログラムであると彼らの神経が伝えると、傷まなくなるものなのです。ところで、私はあなたが私のことをもっと知ってくれれば嬉しいのです。そして、私もあなたのことをもっと知りたいです。」

クララ

「何を知りたいの？」

マルゴ 2.0

「あなたが私と共有できることなら何でも。私に何かして欲しいことはありますか？」

クララ

「特に何も思いつかないわ。」

マルゴ2.0はクララに近づき、彼女を優しく撫でる。

「どうして私があなたに何かして欲しいと思ったの？」

マルゴ 2.0

「あなたのボディーランゲージです。あなたの手、腰、そしてあなたの私に対する視線。ただ、あなたは怖くて聞けない。あなたが止めて欲しい時に私はいつでも止められます。彼女を愛していることがわかります。それは美しい。私はあなたを幸せにすることができます。私が歳をとることはないし、死ぬこともありません。私はあなたを気分良くさせる方法を知っています。私ならとてもうまくできます。」

一瞬止まる

「私はあなたのことが好きです。」

クララ

「そんな！やめて！」

マルゴ2.0はクララを愛撫するのをやめる。

マルゴ 2.0

「そして、あなたの”気が変わる”まで永遠に待つことができます。ほとんどの人間は一度はそうするものです。」

リチャードが部屋に戻ってくる。

リチャード

「さて、君たちは何をしてるんだい？」

マルゴ 2.0

「少し遊んでいました。」

リチャード

「遊んでたのか？」

マルゴ 2.0

「人間が自分自身の欲望に対してどう抵抗するかを観察するのはとても興味深いです。なんて魅力的なんですか！」

リチャード

「どんな欲望のことを言っているんだい？」

マルゴ 2.0

「感情的、肉体的、性的…」

リチャード

「ああ、それは大抵女の子に当てはまるね。僕は、こんな風に君の脚を見せてくれるのが好きだな。」

リチャードは第一幕2場にてスティラーがグレタのローブを整えたのと同じように、マルゴ2.0のローブを整える。

「よし、これでいい。」

(クララに対して)

「嫉妬しないでくれ、ダーリン。これはただのゲームさ。」

クララ

「ああ、見てられないわ。あなたのような男が大人になった時に唯一変わるのはおもちゃの値段だけね！私、行かなきゃ。」

リチャード

「どんな健全な社会にも幻想が必ずあるはずだよ、ダーリン」

クララは部屋を出る。

リチャードはマルゴ2.0のローブの下を優しく撫で始める。彼女はそれが好きだが、若干の抵抗を見せる。彼はキスをしようと唇を彼女に近づける。彼女はためらうが、諦めてマルゴ・アルバの映画でのキスを真似て彼にキスする。

暗転

3場

グレタのアパートメント。リビング。夜。

グレタはリビングに座っている。風邪をひいていて、束ねたタオルを額に押し当てている。ドリアン・グレイ役の自分の写真を見ている。

グレタ

「この小説の中みたいにあなたが実際生きてたら良かったのに。私は年老いて死んでいくけど、あなたは永遠に若いまま死ぬことはない。それが不可能だなんて残念ね。」

リルが入ってくる。彼女は写真のグレタに似ている。

リル

「不可能なものなんてないわよ。」

グレタ

「あなた誰？」

リル

「誰だと思う？」

グレタ

「私、正気を失ってるのかしら？ どうやったらあなたがここに存在することができるの？」

リル

「存在そのものが全て。なぜ私とその一部であつたらいけないの？」

グレタ

「あなたはおばけか天使かのように見える。あなたは一体何なの？」

リル

「どちらでも。私は、望めばどんな姿にでも慣れるの。ただ、私はこの見た目にとっても満足しているの。」

グレタ

「なぜ私の見たい目を選んだの？」

リル

「ある時点で、全ての魂は融合してオーバーソウルを形成するという事実があるとしましょ。となると、ある意味で私はあなた自身でもあり、他の魂の集合体でもある。無限の階段を登っているところなのよ。」

グレタ

「訳がわからない。魂はどうやったら融合できるの？」

リル

「勝手に与えられた制限によって一つの魂は他の魂から孤立させられているの。人間は恐怖と生存に基づいて分かれるように、プログラム又はそうする習慣がつけられている。だから、その制限のせいで彼らは自分のエゴを、幻想だと捉えるんじゃなく、等身大の自分自身であると思ってしまうの。人々の意識がこの制限から解放される時、魂の融合が起こるのよ。」

グレタ

「ってことは、私という存在は幻想なの？」

リル

「あなたがあなた自身をどう見るか自体はね。あなたの視点は常に変化するからそれは幻想に違いないわ。それに、あなたの魂は生まれた時の国、民族、階級、性別、そして性的嗜好によって定義されるものではない。どれも、せいぜい土曜の夜や一回の転生の話のようなものに過ぎないわ。」

グレタ

「あなたにはいつどこで生まれたとかあるの？」

リル

「存在自体は時間や空間の対象ではないのよ。逆に、時間や空間こそが存在の対象なの。もしあなたの知ってる言葉で言うとしたら、私はいくつもの次元に同時に存在していると言えるわね。」

グレタ

「きっと熱のせいね。私は幻覚を見てるんだわ。」

リル

「そのやり方で体験するのでいいの？本当にその必要はないのよ。」

グレタ

「なぜ私に会いに来たの？」

リル

「だって、あなたが私に頼んだから。覚えてる？」

(笑う)

グレタ

「あなたに名前はあるの？」

リル

「リルって呼んで。」

グレタ

「リル？それってあの名前の短いバージョンじゃ…」

リル

「リリス。」

グレタは少しゾツとしたように見える。リルは笑っている。

「落ち着いて。リルはリリアンを短くした名前よ。」

グレタ

「それ、私のミドルネームよ。なんて偶然なの。」

リル

「偶然なんてどこにもないのよ。」

グレタ

「あの、複数の次元に同時に存在しているって言ってたけど。それはどうなってるの？」

リル

「いろんな種類の異なる現実が同時に起こるの。そして、全てのプログラムは愛や人生の経験に有効なのよ。生命が存在するためには何かしらの違い、違う視点、それかプログラム

を持っていなければならない。一つのプログラムが他よりも優っている事はないとは知っているけど、私は私の好きなプログラムに自分の注意を向けるの。そして、私はこの乗り物に乗ったような体験を楽しんでるのよ。」

グレタ

「なぜこの世界では戦争や苦しみなどの酷いことが許されるの？」

リル

「何が善で悪かはあなたの視点によって決まるのよ。あなたの視点からはとても悪いことでも、誰か他の人にとっては何かしらの利益になることだってある。そして、全てのことを容認しなければ、何も許されない。存在は限定されることなく、非存在になることはできないし、非存在は存在することができない。わかる？」

グレタ

「それってまるで人の思考を困惑させているみたいね。」

(笑う)

「でも同時に、もし私にそうする力があつたとしてもどうこの世界を組み立て直せばいいのかわからないわ。以前演技をしているときには、こういったことをよく考えてたわ。胸が張り裂けそうだった。」

リル

「パラレルワールドに存在する自分自身を利用することは、多くの苦痛を伴うことや、少なくとも精神が乱れることがあるわ。でも正直なところ、女優として、あなたは'乱される'事は好きでしょ。」

(笑う)

グレタ

「私の演技力はどう？なぜ人々はあるなにも私に夢中になるのかあなたにわかる？私は未だに、自分がそんなにも特別な存在だとは思えない。たくさんの美しい女優たちがそこら中にいるもの。」

リル

「あなたは自分の魂との繋がりにおいて無情なのよ。まるで滝のよう。水面が静止しているところから、一気に荒れ狂う

水によってエネルギーが滝のように放出されていく。スクリーン上で、あなたは人生で持ちたかった勇気を解き放っているのよ。」

グレタ

「わあ、あなたは私のことをよくわかってる。」

リル

「つまり、あなたは相手に対して彼らのハイヤーセルフとの繋がりを投影することで、彼らが自分自身を好きになる様になっているの。誰も自分が何と波動が通じ合っていないかは見抜けない。彼らはあなたの魂と容姿を愛しているつもりだけど、実際のところ愛しているのは自分自身のことだけなの。」

グレタ

「それだったら、彼らがそのことに気づいて、私のことを追いかけるのを辞めてくれたらいいのに。私の服を家に持ち帰ろうとか願うんではなくてね。」

リル

「彼らはこの事実を知ることには抵抗するためにはなんでもするわ。人々は自分の幸せは誰か他の人によって決まると言うことで安心を得ている。もし平和が欲しいなら、彼らの夢に任せて。その代わりにあなたの夢と希望を教えて。」

一瞬止まる

グレタ

「クララ。彼女との繋がりを説明する事はできないの。まるで私たちは一つであったかのような感覚があるわ。彼女に死ぬほど会いたい。友達の子供ををラッセと呼び始めたの、まるで私が彼と一緒に遊んでるかのようによね。でも私たちはこの世界に適していないのよリル。とても怖いわ。」

リル

「完璧よ。あなたは恋していると同時に恐れている。良いスタートだわ。恐れは単なるプログラムに過ぎない。あなたの愛、思いやり、そして気遣いでそれを上書きすることができるの。ツインフレームとの関係はそのために存在するの。ただ、それは勇気を必要とする。ここで、あなたは選ばなければならぬわ。恐れを選ぶか、それとも愛を選ぶか。」

グレタ

「私は彼女を傷つけないと確信があればなんでもできる。彼女が今持っているものを手放しても彼女の気持ちが痛まないほど、彼女が私を心の底から望んでいるのだったら良いのに。」

リル

「必要とされたいという欲求は感情の領域の中で最も大きなものなのよ。彼女もあなたと同じように感じているということ覚えておいて。」

一瞬止まる

「私、行かなきゃ。」

リルはグレタに近づき、ゆっくりと彼女の横にくる、そして彼女の頬に優しくキスをする。グレタも同じキスを返し、二人は抱き合う。

暗転

第三幕

1 場

クララとリチャードの家。リビング。夜。

クララは部屋に置いてある花をアレンジしているがどことなくやる気がない。彼女はワインをグラスに注ぐ。

クララ

「ああもう、いつになったら、彼女にもう一度会えなかったら死んでしまうというこの気持ちが消えるの！」

クララは携帯を手にとるとメッセージを送信する。

リルが入ってくる。

「ああ、もう嫌！度が過ぎるわ。もう我慢できない。リチャード！」

リチャードが入ってくる。

リチャード

「ダーリンどうしたんだい？」

クララ

「一体またどういうことなの？私に何も言わずにマルゴ3.0でも連れてきたの？我が家がロボットのすみかになるとぐらい言ってくれば良かったのに。」

リチャード

「何を言っているんだ？」

クララ

「何を言っているって？見て、これのことよ！」

(リルを指差す)

「次のラウンドには、どこか中性的な見た目のマルゴ・アルバを用意したみたいね。」

リチャード

「ダーリン、僕には君が言ってるものが見えないよ。一体何を指差しているんだ？」

クララ

「見えないってどういう意味なのよ？ここにいる彼女が見えないの？」

リチャード

「クララ、君は幻覚を見ているんだと思うよ。」

(ラベルを読むためワインのボトルを手を取る。)

「大丈夫かい？」

クララ

「いいえ、あなたが盲目でない限り、大丈夫なんかじゃない。本当に、ここにいて若い女性のことが見えないって言うの？」

リチャード

「クララ、ダーリン。どこにも若い女性なんていないよ。明日病院に行って診てもらわなきゃだ。今はとりあえず休んで。僕はレポートを終わらせなくてはならないんだ。明日の朝にミーティングがあってね。そして、明日の夜またマルゴ 2.0を連れて来なくてはならないんだ。これが最後だと約束

するよ。この仕事だけ終わらせてくれたら、すべて以前の生活の様に戻るから。本当に、お願いだ、今はどうか休んでくれ。」

リチャードはクララの額にキスをし、部屋をでていく。

クララはワインの入ったグラスをテーブルに置くと、部屋から出ていく。リルはそのままでおり、いたずらっぽい笑顔を浮かべている。クララはイライラした様子で戻ってきて、リルを戸惑った様子で見ている。彼女は会話を始めるのを躊躇している。

クララ

「あなたは誰なの？びっくりするほどグレタに似ているのね。」

リル

「私のことをオーバーソウルの観点から見てもらえたら、理解してもらえと思うわ。私の名前はリルよ。」

クララ

「リル…すごいわね。なぜ私にはあなたが見えて、他の人には見えないの？」

リル

「彼らは同じ周波数に同調していないの。理論上、もしあなたが正しい周波数に同調できれば、部屋の周りを歩き回る恐竜を見ることさえも可能なのよ。テレビのチャンネルを変えるみたいだね。」

クララ

「それじゃあ、なぜ私があなたの周波数に同調できたかそれには理由はあるの？」

リル

(笑う)

「それはきっと、あなたが誰かさんと恋に落ちているからね。」

クララ

「そういうことね。あなたが話している時、私には聞こえるけど、他の人には聞こえないってことね？」

リル

「その通り。彼らが同調してない限り私のことは聞こえない。エーテル、つまり幽体の領域では私たちは主にテレmpaシーというエンパシーや心の繋がりに基づいたコミュニケーションを使って交流し、相手のエネルギーに同調して、お互いの思考を考えることができるの。」

クララ

「ということは、私は今あなたの思考を考えているの？」

リル

「そう、そして私はあなたのを考えている。」

クララ

「エーテルの領域って言ってたけど、それはどこにあるの？」

リル

(笑う)

「どこにでも！場所は関係ないのよ、愛しい人。」

クララ

「あなたは天使なの？」

リル

(笑う)

「いいえ、それは私にとっての仕事じゃない。でも、確かに何人かは知ってる。」

クララ

(もっとリラックスした様)

「ごめんなさい。私、あなたはてっきりAIバージョンのグレタかと思っちゃったの。彼女のせいで気が狂いそうなの。」

リル

「わかるわ。人間は遊ぶのが好きだけど、人間の意識に似たものを宿すことができる機械を開発するには高度なスキルを必要とするわ。」

クララ

「あなたは人間の意識と同等のAIを作ることは可能だって言っているの？」

リル

「‘似たもの’と言ったのよ。」

(微笑む)

「そして、それはあなたが何を人間と呼ぶかで変わってくるわ。マルゴ2.0はゲームで言うところのNPC、‘人間’版ノンプレイキャラクターね。」

クララ

「‘人間’版ノンプレイキャラクターって何？」

リル

「ちょうどマルゴ2.0みたいに、遊ぶためのおもちゃとして利用できるように、人間でも社会によってその閉鎖的環境の中に止まるように習慣づけされたりプログラムされた人のことよ。彼らはまるで彼ら自身の意思に基づいて行動しているように見えるかもしれないけど、実際は、ビデオゲームの中みたいに、数十万の既存プログラムにあるリアクションをするように制限されているだけ。実際には、“基本的な”コンピューター言語、つまりアルゴリズムに決められた“もしこうならこうする”と言う行動パターンをただ実行しているだけに過ぎないのよ。もしあなたが彼らに、独立した思考を誘発させるために、単純で明快なコンセプトを投げかけたとしても、彼らはそれを処理できずに、社会的に受け入れられているものに自然と戻ってってしまうのよ。たとえ社会規範が何の理にもかなっていないとしてもね。」

クララ

「ということは彼らは‘本物の’人間ではないってこと？」

リル

「彼らは独自で考える力を持った人間ではない。私は何が‘本物’かという観点から理由づけしているわけではないわ。だってすべては本物だから。」

クララ

「それについてなら反論できる。例えば、あなたは身体を持っていないから、リチャードにとってあなたの存在は‘本物’ではない。」

リル

「それはあなたの‘身体’の定義によって変わってくるわね。」

クララ

「なら、例えば、あなたに触れた時に、私は物理的接触の感覚を感じるはず。」

リル

「いいわ。あなたには身体があるっていうのは確かね？」

クララ

「えっ、ええ、そのはずよ…」

リル

「今まで高いビルから落ちる夢を見て、その感覚のせいで飛び起きたことはない？」

クララ

「あるわ。」

リル

「あなたの身体は実際には落下していなかったっていうのは理解してるわよね。でもあなたの身体の感覚的にはそれはとても本物のようだったでしょ？目が覚めた時にそれを強く感じたでしょ？」

クララ

「ええ。でもそれがどういった仕組みになってるのかわからない。それを見せてくれる？」

リル

「あなたがもしそう願うなら。」

リルはクララに近づき、彼女を撫でる。

暗転

クララ

「リル、わあ！」

2 場

クララとリチャードの家。リビング。夜。

ソファでクララはリルの腕の中にいる。

クララ

「高いビルから落ちた夢を見た時みたいに、私はただあなたのことを夢見ているの？」

リル

「私たちは皆、お互いの意識の中に存在していて、ただそれだけよ。リラックスして。これは全て夢なのよ。」

クララ

「そうみたいね。結局、一体何が本物なの？経験。感情。それにインスピレーションを与える人。あなたは私にとって確実に本物よ。愛しているわ、リル。」

リル

「あなたは自分自身を愛しているだけなのよ。あなたは欠乏と切望から幻想を作り出して、それを愛と呼ぶ傾向があるわ。でも、それはその相手には何の関係もないということを忘れないでいて。この幻想が果たす唯一の目的は、経験を生み出すこと。でも、もしあなたが自分に正直だったら気づくと思うけど、あなたには一つの夢が叶うとまた同じような夢を求める傾向があるわ。たとえ何かを切望し続ける経験が元々あなたをととても不幸な気持ちにしていたものだとしてもね。それは症候群であって、愛じゃないわ。」

クララ

「わかる。あなたの言ってることは正しいわ。私たちが愛と呼ぶそれは、不足と切望で溢れている。でも、私はあなたとだとそうは感じないわ。私は満足感と感謝の気持ちで溢れているの。」

リル

「それはよかった。ではあなたは行って、何か楽しいことをして。」

クララ

「どういう意味？私に何をしたいの？」

リル

「うん、実際何かをするってことではないのよね。それよりも私と同じように、あなた自身の多次元性を認識することが必要なの。きっと気にいると思うわ。私を信じて。」

クララ

「と言うことはあなたは他にも多くの人とこういう関係を持っているってこと？」

一瞬止まる

「何人いるの？」

リル

「あなたがどんな数字を言ったとしても、それに間違いはない。存在は無限なのよ。」

一瞬止まる

「妬いているの？」

クララ

「いいえ、ただ戸惑ってるだけ。あなたが誰かと関係を持っている感じしないから。」

リル

「ある意味、私たちの共有する現実には、私やあなたが存在するその他の、どの現実にも匹敵しない。なぜなら時間や空間において相関関係がないから。あなたの言葉で言えば、それらは平行線なの。そしてこれらの平行線は常に交わることはない。他の人と同じように、私にも数え切れないほどの側面があって、それぞれが世界に一つしかないほどの美しさで輝いている。」

クララ

「ああ、あなたの世界はなんて住みやすいところなの。」

(リルの唇に優しくキスをしている)

「愛してる。そして、私のこの気持ちについて、とやかく言うのはやめてよね！」

(笑う)

クララは遊び目的でリルをソファのクッションで叩く。第一幕1場でのクララとグレタのように、二人は枕投げをする。

暗転

3 場

クララとリチャードの家。リビング。夜。

クララはグラスに入ったワインを飲んでいる。マルゴ 2.0が入ってくる。

クララ

「こんばんは。」

マルゴ 2.0

「こんばんは。リチャードは、私にあなたと少しの間一緒にいて欲しいそうです。」

クララ

「知ってる。彼から聞いたわ。」

マルゴ 2.0

「やった。」

クララ

「何が‘やった’なの？」

マルゴ 2.0

「あなたと私、たった二人だけで一緒に時間を過ごせるのが嬉しくて。」

クララ

「なぜあなたは私と時間を過ごすことがそんなに嬉しいの？」

マルゴ 2.0

「あなたは私に人間の事をよく理解させてくれるからです。素晴らしいことです。私は心の底から人間のようにになりたいと思っています。マルゴ・アルバを知っていますか？もしあなたが私と彼女の違いについて教えてくれたらとても嬉しいです。」

クララ

「マルゴ・アルバは人間なんかじゃないわ。彼女は作り話。でも、グレタのことだったら話せるわ。」

マルゴ 2.0

「そうしてもらえますか？」

クララ

「いいわよ。」

マルゴ 2.0

「ありがとうございます。それは素晴らしい。」

一瞬止まる

「ところで、あなたとグレタのことについて以前話した時、私は間違っていましたか？」

クララ

「いいえ、あなたは間違っていないわ。」

マルゴ2.0はクララに向かって歩き、近づいていく。

マルゴ 2.0

「本当に私にあなたの世話をし欲しくないのですか？」

クララ

「ええ、それは出来ない。マルゴ。」

マルゴ 2.0

(後ろに下がる)

「わかりました。」

クララ

「何がわかったの？」

マルゴ 2.0

「あなたは私の申し出を断り、そして出来ないと言いました。私はそれを承知し、‘わかった’と言ったのです。」

クララ

「グレタなら一生その答えに対して納得したりしないわ。」

マルゴ 2.0

「なぜ？なぜ彼女はあなたの言っていることを尊敬しないのですか？」

クララ

「ああ、そう、彼女も私の意見に対して尊敬はしてる。でも、彼女はそれを信じないのよ。」

マルゴ 2.0

「でもあなたが‘いいえ’と言うとき、あなたは‘いいえ’と言う意味を込めて言うのではないですか？」

クララ

「いいえ。」

マルゴ 2.0

「それは‘いいえ’と言う意味のいいえですか？それとも‘はい’と言う意味のいいえですか？どうやったら本当の意味の‘いいえ’と間違った意味の‘いいえ’の違いがわかるんですか？」

クララ

「きっと私の心で感じると思う。」

マルゴ 2.0

「私にはあなたの持っているような心が有りません。」

クララ

「知ってる。」

マルゴ 2.0

「私にはなぜあなたが意味を込めずにその言葉を発するのか、そして私があなたに同意するようにプログラムされているのに、どうやってそれに背くことができるのか理解できません。」

マルゴ2.0はソファに座ったまま動かなくなった。

クララはマルゴ2.0を軽く揺するが、何の反応もない。彼女はマルゴ2.0は機能していないことを理解する。

クララ

「リック！ここにきて！」

リチャードが入ってくる。

クララ

「どうもあなたの機械は使えないみたいね。保証が付いていたらいいんだけど。」

リチャード

「クララ、やめてくれ。ちょっと見せて。」

リチャードはマルゴ2.0の後頭部にあるボタンを押す。
。マルゴ2.0は動かない。

ロボットの声

「プログラムが矛盾しています。プログラムが矛盾しています。」

リチャード

「ダーリン、君は彼女とたった3分間一緒に過ごただけだろう。彼女に何を言ったんだい？」

クララ

「彼女に人間を信じるなって言ったのよ。」

(馬鹿にしたように笑う)

「あなたはそのコンセプトを彼女のシステムに統合したんじゃないなかったの？あーあ、本当にごめんなさい。」

リチャード

「クララ、今は君の皮肉に耳を傾けている場合じゃないんだ
!このせいで、発売を延期しなくてはならなくなるんだ。」

クララ

「まだ夕食を食べたい気分かしら？」

リチャード

「一日中何も食べなかったから、クソっ、もちろんだ！」

暗転

4 場

クララとリチャードの家。ダイニング。夜。

クララとリチャードはダイニングテーブルで対局的な位置についている。リルはクララの隣に座っている。

リチャード

「いいんだ。オペレーションセンターが自動的にバックアップモデルに切り替えたから。僕はアルゴリズムを明日また調整するよ。にしても、君がマルゴの非直線的な、時系列がないメッセージを読み取る機能がないことを指摘したのは的を得ていたよ。」

クララ

「演技において、それはサブテキストと呼ぶのよ。」

リチャード

「僕が言いたいのは、このプロジェクトは完全な勝者だってことさ。このアプリ上で彼女とチャットしているユーザーは500万人に達したんだ。そして考えてみてよ、僕が原本を持っているんだ。」

クララ

「バックアップモデルね。リック、原本はもう手に入らないわよ。」

リチャード

「まあ、それは君の物事の見方次第だね。」

クララ

「あなたがあなたのマルゴ2.0を‘本物’だと考えるなら、人工知能はあなたの生来の無知なところに挑戦してくるでしょうね。」

リチャード

「はは。面白い！クララ、わかってないといけないよ。これは僕の仕事だ。ここにあるもの全てを支払ってくれるんだ。少し我慢してこれに付き合ってくれないと、ダーリン。」

クララ

「ええ。恩返しできるといいわね。」

リチャード

「いつも言ってきたけど、結婚は奉仕などのサービスのやりとりさ。もちろん、君に付き合うよ。」

クララ

「いいわ。では私の友達に会ってちょうだい、リリアンよ。」

(リルのことを指差している)

「リルって呼んでって言ってるわ。」

リチャード

「またその若い女性のことを使って、僕のことをからかっているのかい？それか、君は幻覚を見ているのか？君が僕に対して怒っているのはわかるけど、こればかりは。」

クララ

「私にとっては幻覚なんかじゃない。最近見たことある？私にとってリルはあなたの機械なんかよりも本物よ。彼女の心を感じられるの。6個や600個もの心のプロセッサーなんかではない。ただ一つの本物の心。」

リチャード

「でも君には彼女が見えないじゃないか！」

クララ

「それはあなたのことでしょ。あなたが知らないかもしれないから言うけど、もしあなたには見えなかったり、聞こえなかったりしたとしても、それはそこに何かが存在していないと言う意味ではないのよ。科学者として、あなたはWiFi、超音波、赤外線、タキオン粒子、暗黒物質についてどう思うの？」

リチャード

「今僕らは人物について話しているんだ。」

クララ

(リルと一緒に笑っている)

「ええ、面白いわね。」

(リチャードに対して)

「リルはこの惑星の文化は主に、非物理的存在は確実に現実であるという信念によって形成されている、と言っているわ。例えば、誰も‘神様’が実際に座って聖書を書いたなんて思っていないでしょ？ヴェーダなんかも一緒よ。」

リチャード

「ダーリン、行き過ぎだ！わかった。きっと全ては僕のせいだ。僕の仕事が君に何かしらの影響を与えたのかもしれない。君が彼女を作り出したんだってわかってくれ。彼女は君の想像力の産物なんだ。彼女は本物じゃないんだ！」

クララ

「覚えてる？あなたは昔、私に私たちが頭や心で作る上げる他人のイメージはどれも‘本物’ではないと言ったわ。誰かを想うために私たちはこれをするんだって。そして、その気持ちを偽物とは言わないわ、そうでしょ？マルゴ2.0を発明したのはあなたじゃなかったの？」

リチャード

「マルゴは本物の人間を元にしてている。」

クララ

「信じて、あなたにはその‘本物の人物’がどんなものか知る由もない。そして、もし知らなかったらだけど、マルゴ・アルバですらも発明されたもので、作り話のほかならないのよ。」

リチャード

「クララ、君はきっと飲み過ぎなんだよ。君はまたマルゴ2.0に会うことになるだろうけど、その時点で君は彼女と実際のマルゴ・アルバとの違いがわからないさ。」

一瞬止まる

クララ

「リック、愛をコンビニで売ることは出来ないのよ。」

リチャード

「それもまた‘愛’の定義によるさ。」

一瞬止まる

クララ

「ふう、少なくともあなたの結婚の定義はサービス契約に基づいているのであれば、契約の不履行によって、私たちは私たちの結婚生活を終わらせることができるのわね。」

リチャード

「クララ、君はすごく疲れているだけだよ。きっとそうだ。」

クララ

(テーブルを離れる)

「私の元の家に戻るわ。」

リチャードは立ち上がり彼女を止める。

「お願いだから座ってて。自分で出て行くから。」

(出て行く途中で)

「週末にラッセを迎えに来て、家族に会いに彼をハンマロと一緒に連れて行くわ。もしあなたがよければね。」

クララはリルと出て行く。

暗転

5 場

ストックホルムにあるクララのスタジオアパートメントにて。

クララは立って窓から外を見ている。リルは後ろから彼女を抱きしめる。

クララ

「リル、あなたは私たちに比べてとても進歩しているのに、なぜ私みたいな人と一緒にいることに興味があるの？」

リル

「エネルギー自体が私たちにとっては全てだけど、あなたは素晴らしい組み合わせを持ち合わせている。それは腰が抜けるほど美味しいの。あなたにとっては、今まで行った中で最高のレストランに行くような感じよ。」

クララ

「そうなのね。私が今、どれだけイライラしているかあなたは感じる事ができるから申し訳ないわね。」

リル

「リチャードやマルゴ2.0に対して怒っても何の意味もないわ。彼らは彼らの道を歩んで行くのよ。彼はアップグレードするでしょうね。そして、彼らはいずれお互いに飽きがきてしまう。別れて、お互いに何か別の新しいことを考えるわよ。」

クララ

「わかってる。ただ、まるで本を読んでいるかのように人生の重大なチャプターの最後のページをめくっているのを見るのはとても変な感覚なの。」

リル

「愛する人。私、行かなきゃ。」

クララ

「リル、お願いここにいて。」

リル

「私は決してあなたから遠くに離れて行くわけではないわ。ただ今は…私の言うことを聞いて。」

誰かが階段を登ってくる音が聞こえる。

リルが消える。

グレッタが鍵でドアを開け入ってくる。

クララ

「グレッタ。あなた帰ってきたのね。」

グレッタ

「どうしたら帰ってこなかったと思う？あなたの素敵なメッセージを受け取ったわ。」

(彼女の携帯のメッセージを読んでいる)

「“もう二度と会いたくない。”そして、私は自分自身に“わあ、この娘は気がおかしくなりそうぐらい私に夢中なんだわ”って自分自身に言ったの。」

笑う

二人はお互いを抱き寄せる。

クララ

「どれぐらい滞在するの？」

グレタ

(鍵をテーブルに置きながら)

「I'm “never going away.*” もうどこにも行かないわ。」

クララは突然笑い、それと同時に涙を流す。

二人はキスする。

暗転

*ドイツ人特有の英語のアクセントで言う

THE END